かなり以前に書いたものですが，今も心に残る地の故に，ここで紹介させて頂きました。

（日本地図センター刊『地図ニュース』No. 218より）11期OB 長岡正利

図-1　ラダック周辺の衛星画像図、上部がインダス河、その右がレー、左はラダックへの最後の峠フォツ・ラ。中央はザンスカール川（Olizane、1：350,000　Ladakh Zanskar、約10分の6に縮小）

ラダックとザンスカールは、インド亜大陸北方のヒマラヤとカラコルム山脈の間の河源近くのインダス河流域にあり、その主邑はそれぞれレーとパダムである。

ラダックとは、チベット語で言う「峰（関嶺）の彼方」の地である。

その語のとおり、周辺のいずれから見ても3000～6000mの関嶺の彼方の、幾つもの峠の向うに弧立した地である。標高は低いところで3500m、気温の年較差50℃・日較差20℃以上、年雨量100㎜以下の荒寥・静寂の地であり、遠く氷河の山々を望む。その気候と高度のゆえに、気味の悪いくらいに澄んだ蒼空と強烈な日差しのもとで、僅かばかりの耕地と小さな集落には釣合わないようなチベット仏教（ラマ教）僧院（ゴンパ）が岩山の麓や頂に古城のようなたたずまいを見せている。

これらの地への起点、インド北部のシュリーナガル（本誌8月号で紹介；本稿はその続きです）からラダックへ至るには、4000m前後の3つの峠を越える2日行程を要する。道は、最初の険しい峠、ゾジ・ラをすぎる頃から風景が一変し、次第に沙漠の様相を見せる。中間地カルギルを過ぎれば、谷間で僅かな水を利用できる土地のほか、山々と大地はことごとく不毛。ヒマラヤ造山運動で隆起・褶曲した地層の異様な色彩を見るのみとなる。また、これ以奥では人々の容貌はモンゴル系となって各所に白亜の仏塔やゴンパが点在するなど、それまでのイスラム文化圏からチベット仏教圏に入る。なお、ザンスカールへは、途中のカルギルより南へ、ジープでさらに2日を要する。

このように、この地は、地理・文化的にはチベット圏にある。かつてはチベットの一王国であったが、近世以降はインドの一部として長くチベット世界とは分離されてきた。しかし、今日でもなお小チベットと呼ばれているように、かつての文化を保ち続けている。これは、天然の要害と苛酷な自然に守られて、外国の支配が強いものとはなり得なかったためにほかならない。

ラダックとザンスカールでは、1947年のインド・パキスタン独立直後からのカシュミールの帰属をめぐる3回の戦争、東部のアクサイ・チンの領有をめぐる中印紛争等の政治的理由から、紛争地域として長く外界との接触を絶たれてきたため、古くから人々の生活の中に生き続けていた仏教とその美術―かの地の人々にとっては信仰の対象そのもの―が1974年の入域解禁によって突然に現代に甦り、伝承されてきた民俗・文化とともに密教系仏教美術研究の面で世界の注目を浴びた。

この付近の地図

インド亜大陸全域の地図の利用については、本誌8月号「スリナガル」の稿で紹介したとおり、米国AMSがかつて作成した25万分1図シリーズ等が利用できる。ほかに、この地方については1987年に作成された衛星画像地図（図-1）があり、等高線はないものの、道路や集落については唯一正確な最新情報として重宝である。

東西交流史の中で

この地は、今でこそ、中印・中パの両国境紛争

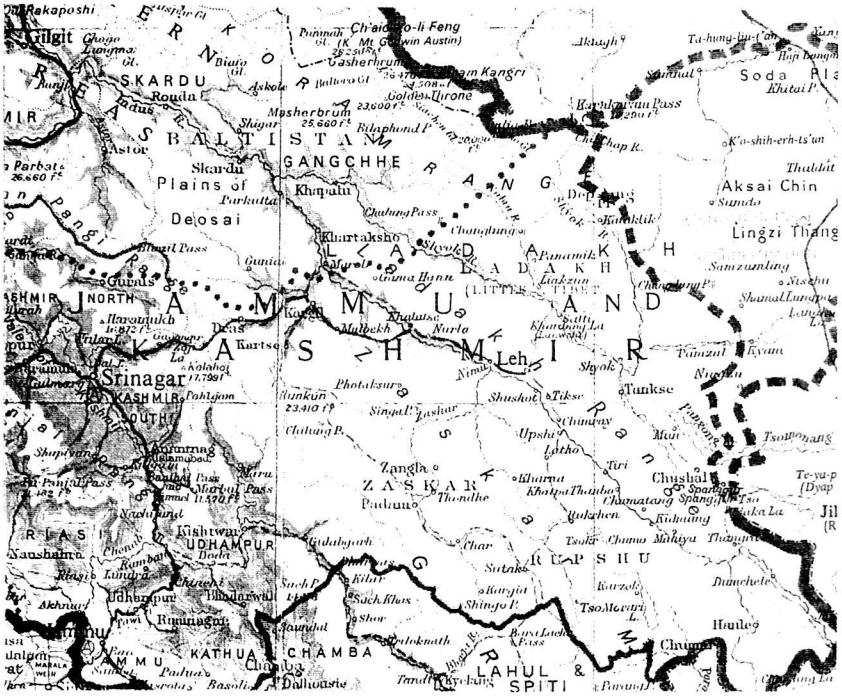


図-2　ラダックの中心地レー（図の右）と、その起点シュリーナガル
図中紫色の点線は印パ停戦ライン、破線は中印係争国境（Bartholomew、1：4,000,000 Indian Subcontinent、10分の9に縮小）

によって三方の国境を閉ざしたままとなっているが、近世には、ヘディン、スタインらの東トルキスタンへの地理的探検隊も通過し、さらに奥地へと峠を越えていった交易上要衝の地であり、かつてはチベットや新疆へ開かれた国際都市であった。

さかのぼれば、インドに生まれ、早くから中国、日本へと伝わっていた仏教は、チベットには7世紀に中国とネパールから伝えられたが、さらに8世紀には当時インドで全盛であった密教がカシュミールとこの地を経てチベットに伝えられ、隆盛を見た。その後、中国、インドと相次いで仏教およびその文化が消滅する中で、奇跡的にこの地に遺った曼荼羅等の図像（写真⑦）はかつてインドにおいて全盛であった大乗仏教の流れを正統的に伝えているものといわれている。

なお、日本とこの地域との歴史的な繋がり・交流は、仏教伝来に関するものを除けば何もない。最近の調査・登山隊を除いて、この地への日本人入域者で知られているのは、明治末期から昭和初期まで中央アジアに広く足跡を残した大谷光瑞の探検隊の一部と明治末の日野陸軍少佐の踏査行位のものである。

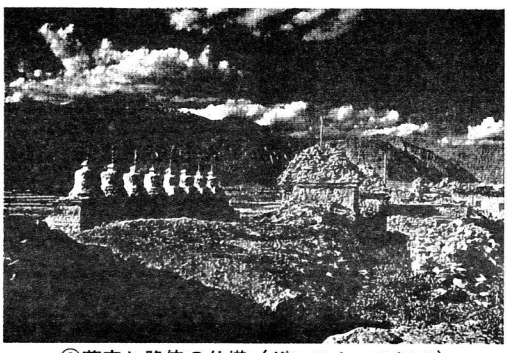
王朝の興亡と現在

ラダックが吐蕃（チベット）の史書に登場するのは、10世紀末である。もとより、人口希薄の地のゆえに、周辺への大きな勢力は及ぼし得なかったが、15世紀にはナムギャル王のもとで、レーを中心に今に残る多くの寺院が建設されるなどの繁栄を見た。その後、中央アジアからのトルコ系民族の侵入、次いで西のバルチスタンの軍勢の侵寇を受け、王国は崩壊の危機に立たされるものの、16・17世紀には再び全盛をむかえ、ナムギャル王朝は仏教の興隆に努めてチベットとの交易も盛んに行われた。しかし17世紀には、チベット・蒙古、カシュミールの軍勢に蚕蝕され、衰退の道を歩むこととなり、19世紀以降は英国統治下のカシュミール藩王国に併合されて現在に至っている。

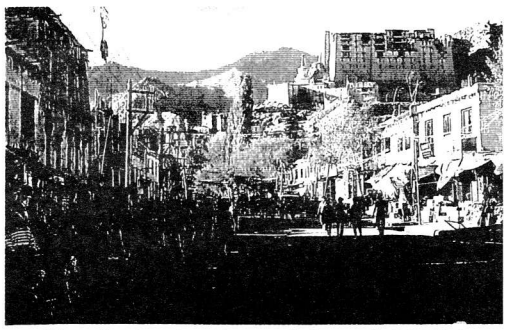
このような歴史を経て、ラダックの中心地レーには、市街のどこからも見え、丘の上から町を睥睨するような9層の王宮の廃虚（写真④）が今に残っている。しかし、僻遠の地ザンスカールでは、かつての王国の都邑とは名ばかりに過疎化が進んで、今では日干しレンガの家が数十軒のみとなったパダム（写真⑤）とさらに奥の寒村ザンラにそれぞれナムギャル王家の末裔が住み、今も村人から「王」として遇されている。

ラダックを世に知らしめ、今も唯一ともいえる観光資源となっているのは、既に述べたとおり、密教系美術の数々が残る僧院（図-1中に点在する＊）であるが、その代表は、ラダックで現存最古のアルチ・ゴンパ（11世紀）であり、整然と描かれた精緻な曼荼羅その他の壁画は壮観を極める。ほかに、陸路ラダックに入る際に岩石砂漠のよう

①不毛の大地を縫うラダックへの道

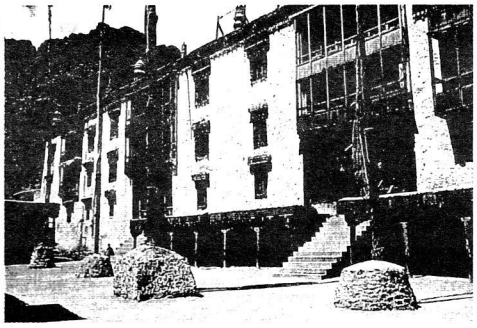

②蒼空と路傍の仏塔（ザンスカールにて）

③たくましく生きる人々（同、路上の行商）



④ラダックの中心地レー、背後の山上は旧王宮

⑤今では見るかげもないザンスカールの中心地パダム、仏塔が点在する土色の街



⑥ラダックで最大のヘミスゴンパ内庭

な山中に見えてくるラマユル・ゴンパレーを過ぎて周辺の無数の仏塔とともに風景との美しい調和を見せるティクセ・ゴンパ、最奥にあって仮面舞踏を伴う初春の大祭が有名な最大規模のヘミス・ゴンパ（写真⑥）等々。ザンスカールではカルシャその他の僧院がある。

谷間に点在する僧院の壁面には、数多くの曼荼羅を始めとして、朱、青、黄白に彩られた守護尊、護法尊の多くが忿怒の異相をなし、時に明妃を抱く。見るものを呪縛するような画像の数々である。苛酷な自然と風土に生きてきたチベットの人々の内に秘めたる鋭い情緒感による凄ましい限りの創造物であろう。

しかし、村々には、仏の加護と来世を信ずるように穏やかな表情でマニ車（廻す毎に、納めた経文を唱えたことになるという）を手にして真言を唱え続ける老人はいても、修行が続けられている筈の僧院には、ほとんど堂守のような、宗教的気迫・緊張感を感じさせ得ないような僧以外には見あたらず（高僧は主都デリー等に滞在の由）、堂内には異彩異形の諸尊と曼荼羅が、周囲を飾る千仏とともに退色し損傷しながらも、不思議に色鮮やかに、冷えびえとした空間をなしているのみである。

この地では、夏も終わりに近い頃から風が吹き始め、微細な土沙を巻き上げて視界を閉ざす日が多くなる。やがて、秋ともなると日々に気温は低下して空は澄み渡り、天地に満つる月の光の白い輝きが地上の霜に見まごうような酷寒の夜が訪れる。

峠は雪に閉ざされ、外界から訪れる人も絶える。ほとんど人々に顧みられなくなった僧院の閉ざされた内陣の闇の中では、幾多の仏の、人々の心を見据えるような眼が永遠の命を長らえているのではないかと——。

（国土地理院）

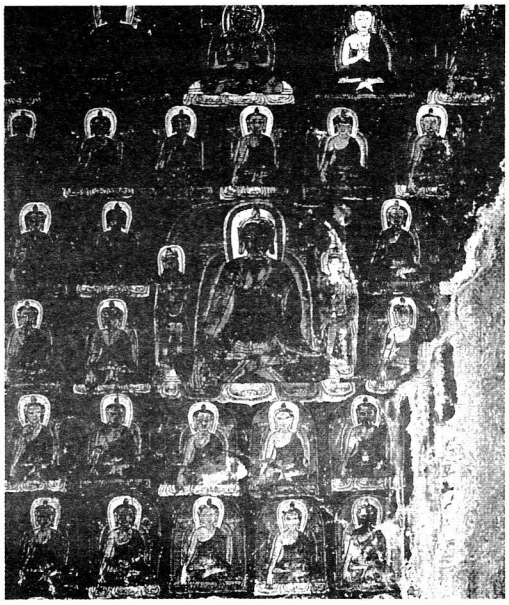
【文献】

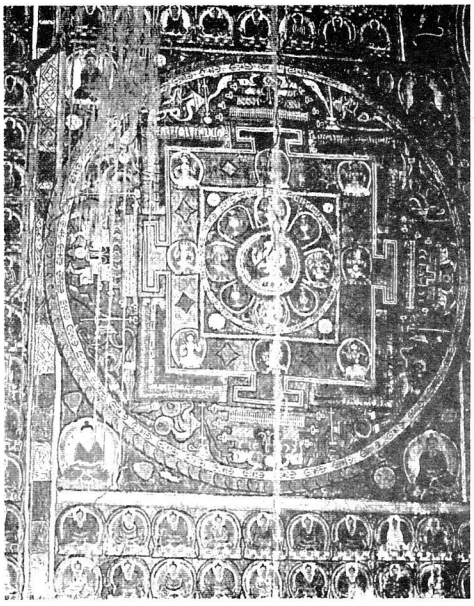
F. de Filippi："Himalaya, Karakoram and Eastern Turkestern", E. Arnold, 1932.

HAAJ：「チベット・ラダック研究」、1973.

岩村武二：「ラダック曼荼羅」、岩波書店、1987.

O. Follmi："Zanskar—A Himalayan Kingdom", Thames & Hudson, 1988.





⑦僧院の壁画の教かず、左：護法尊マハカーラ（日本に渡って大黒さま）、中：千体仏の一部、右：別尊曼荼羅

熱い大地の想い出話
Ｐａｒｔ Ⅱ

33期　佐藤　かおり

もう何号も前に（編者注　会報６号）、熱い大地の想い出話（パラグアイの話）を書かせてもらいました。また今回も、熱い大地（南米大陸）の話を書かせてもらいます。

あ、そうそう、申し遅れましたが、私、結婚しました！（編者注　旧姓西村かおりさん）その甘～い？新婚旅行の話です。私を知ってる方は、私がずーと自由な独身生活を楽しむだろうと思っていたでしょうが、ふとしたタイミングでこうなり、新婚旅行で、南米大陸最高峰゛アコンカグア゛へ登ってきたのであります。今回、その日程、費用などまとめて何かの参考になれば、そして、是非行ってみてもらいたいと思っております。

アコンカグアというと、ヒマラヤ以外では一番高い山、標高6959m、もしくは6962mということで、高所登山になります。皆、高山病の不安から「行けない！」と敬遠してませんか？あせって登れば高山病も出るでしょうが、マイペースでゆっくりと、余裕をもって高度順応すれば、必ずこのくらいの標高なら登れると思います。しかし、休みがとれない！これが一番の問題でしょう。だって、アルゼンチンのメンドーサ（登山基地）まで３日はかかります。もちろん直行便はありません。私達は、サンチアゴ（チリ）経由で国境を夜行バスで越えました。（37曲がりの急カーブ立山なんて目じゃない！）

舟田さんに「キーッ！私も行きたい！と思えるような原稿を」と頼まれたのですが、登山自体はそんなに楽ではなかったので、キーッ！という感じはしないと思います。

キリマンジャロの時は小屋泊りで、ガイド、ポーター付き、食事もいっぱいおいしいものを作ってくれたので、個装だけ持ってぶらぶらゆっくり行けばよかったし、ジャングルから草原までのいろいろな美しい植物も見れました。ヒマラヤトレッキングの時も、ポーター、コックとの大名行列で、至れり尽くせりの待遇で快適でした。途中の村や寺や人々、シャクナゲや風景も美しく、興味深かった。アコンカグアは、そんな風に行けるところではないということをお断りしておきます。お金を出せば大名行列も出来るかもしれませんが、ピークアタックとなると、そう甘くはありません。B.C.が4000m以上だし、6000m以上での歩行は１歩がつらくて５歩ずつ歩くのが精一杯でした。やはり一般人が全て行けるわけではないので、ガイド登山は南壁トレッキング（4000m付近）が多いようです。

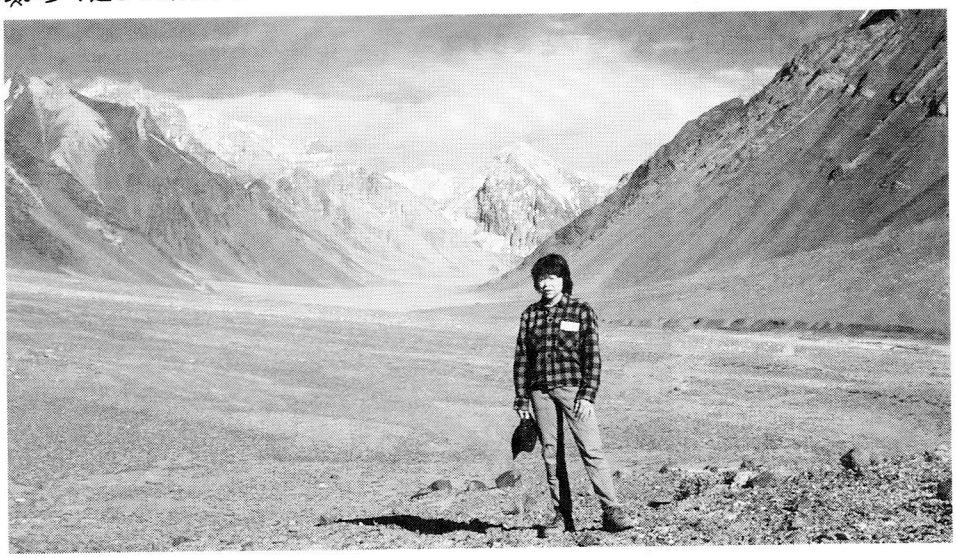
ちなみに、今年は2000年をまたぐ登山ということで、人が多く入っていて、3000人くらいがシーズン中アタックに入るだろうとのことでした。私達は、 237、 238番目でした。

私達は全て二人でやったので、食事は全て自分達で準備（買い出しから、パッキング、調理まで）し、生活用品もほとんど持って行きました。（テント、コンロ、シュラフなど。レンタルもあるが、それほどいいものはない。）

B.C.までは、゛ムーラ゛（馬みたいなの！？）が食料を運んでくれたけれど、高度順応の為、私達は、B.C.まで行くのも荷を13kg程ずつ担いでトレッキングです。B.C.からＣ（キャンプ）を一つずつ上げる荷揚げも、全て自分達でやりました。そしてつまらないことに植生が乏し

【チリ、アルゼンチン国境】

【登山申請後のトレッキング道。正面奥がアコンカグア。ここら辺は、ハイカー、トレッキングの人が多く遊びに来る。】



【コンフルエンシアへの道。オルコネス谷がずっと続く】

いのです。景色は、B.C.までででも、オルコネス谷の河原の乾燥強風地帯で、砂・石だらけ。B.C.から上もザレザレでつまらない。初めだけ（コンフルエンシアまで）少し緑があって鳥が飛んでいたなあくらいで、あとは無機質な世界でした。こんなこと書くと行きたくないと思うでしょうか？厳しーい、淋しい世界です。

登山の内容については、食料、装備表、行動表、日程表などを見て下さい。ここでは登山基地メンドーサ、B.C.の様子を書いてみます。

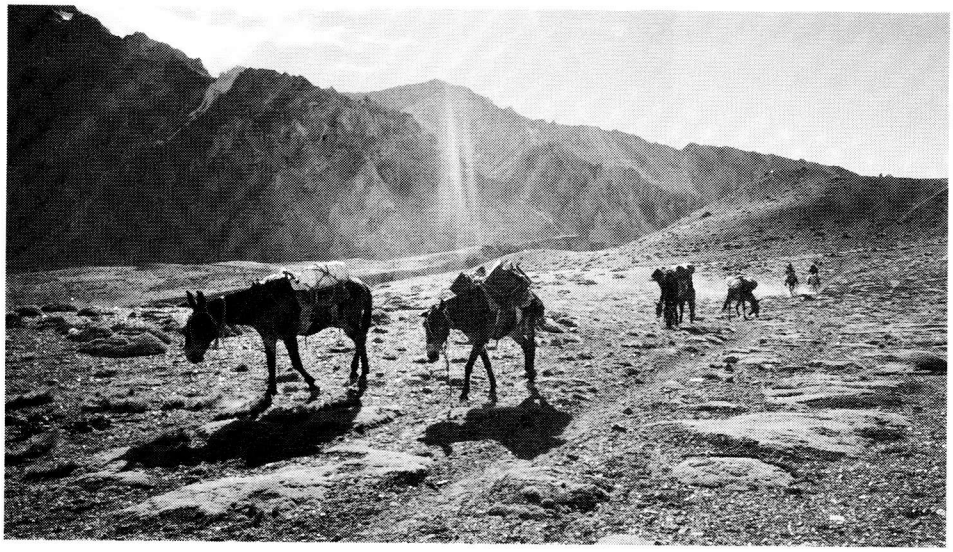
登山基地〝メンドーサ〟、聞き覚えないですか？ワインの産地です。日本に入っているアルゼンチンワインを見て下さい。きっとメンドーサの名前を見つけるでしょう。私達はボデガー（ワイン倉庫）見学と試飲をし、ワインも何本か担いで帰ってきました。

メンドーサは各国のトレッカー達がうろうろしていて、登山用品店、レンタル店、ムーラの手配、レンジャー小屋（入山届をチェックするところ）までの交通機関の手配などをするエージェントが多くあり、登山許可証をもらうところもこの街にあります。交渉は英語かスペイン語です。ちなみに一般の人々は英語も分かりません。

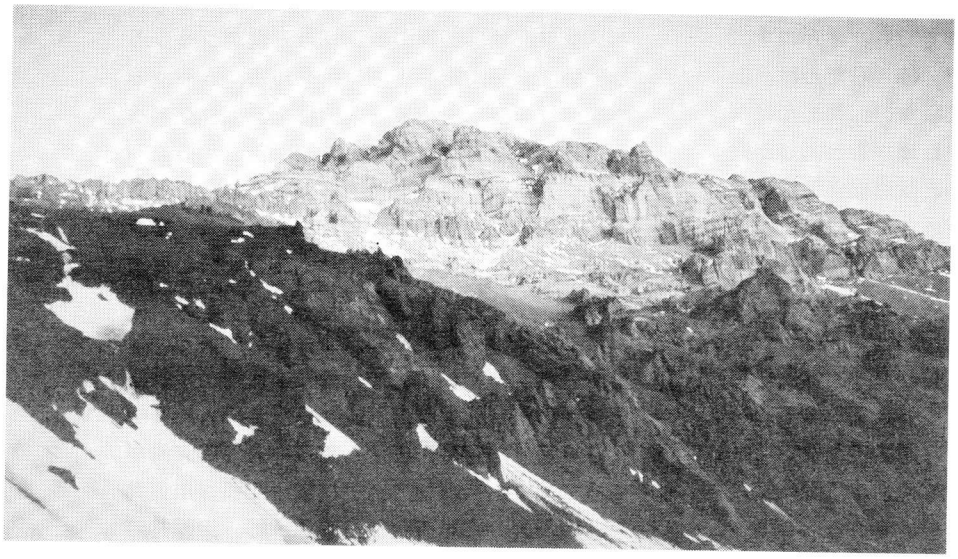
宿泊施設は街の中心に、安いのから高いのまでありますが、日本人にお薦めするのが「民宿アコンカグア」です。（街から空港の方へ８㎞くらい行った郊外）移住した日本人増田夫婦がやっててて、アコンカグアに登った長谷川恒男や、山田昇、植村直己、三浦雄一郎、田部井淳子なども来ていて、写真やサインがあります。そして、ノート（記録帳）や資料も揃っていて参考になるし、日本語の文庫本などもあります

。自炊なので好きなものが食べれるし、安全です。（南米の安ホテルなどでは、まれに荷物がなくなることがある）お風呂もあるので旅の疲れもとれるし、郊外なので静かに寝れます。のんびりするにはもってこいです。）そして、頼めばいろいろな手配もやってくれます。語学に自信のない人、日程に余裕がない人にはお薦めです！ちなみに、好意でシーズン中のみやってるだけなので、予約が必要です。

次にB.C.の様子ですが、テント村ができています。それぞれ個人用のテントも多くありますが、様々なトレッキング会社の大テントが多くあって、下山の荷を運ぶムーラの手配、下山後の交通機関の手配などをしてくれるし、レストラン、バーもあります。パソコンや携帯電話を使って下界と連絡してくれるので、安心です。医療テントも大きいのが二つあります。医療は常駐です。非常に親切で、私も咳がとまらず薬をもらいました。（日本語は通じません）B.C.には共同トイレ（汚い！）が掘ってあります。お金を出せば綺麗なトイレの鍵を借りられます。（20$）。B.C.にはシャワーもあります。（ソーラーシステム。10$／回）温かいかは不明です。B.C.近く（15分くらい離れた所）にはホテルがあって、泊まれるし、おいしい食事もあります。C２への荷揚げ後、ここで休養し、力を蓄えて、ピークアタックという人もいます。B.C.では氷河の融けた流れている水を使います。朝はまだきれいそうだけど、昼からは茶色く汚そう！欧米人は浄化するポンプを持って来ていました。私達は布フィルターだけでした。そして、B.C.では日本人にも会えます。（単独で来ている人が多い）私達は10人くらいと話をし、情報交換をしました。日本食を分けてもらったり、下山時にいらない物をあげてきました。



【ムーラが荷を運ぶ。（B.C.まで）】



【B.C.からアコンカグア頂上を見る（夕焼け）】

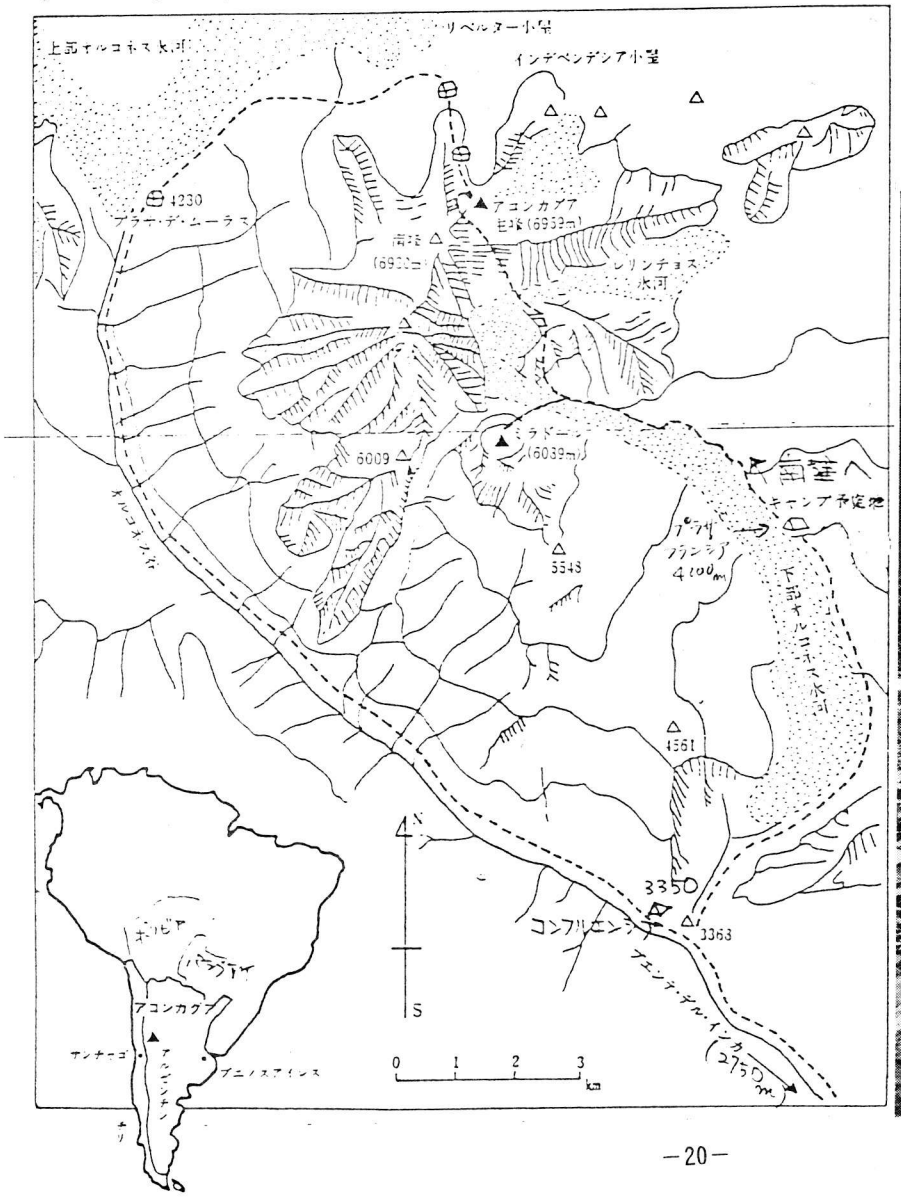
きよし＆かおりのアコンカグア登山

12/13(月)	12:30	イースターアイランド発(LA834)
	19:15	サンチアゴ着(サンチアゴ泊)
	22:00	バスでアルゼンチンのメンドーサへ
12/14(火)	4:00	メンドーサ着　泊:民宿アコンカグア
	午後	登山準備(登山申請, 装備レンタル)
12/15(水)	午前	登山準備(買出し)
	午後	パッキング
12/16(木)	5:00	バスでプエンテ・デル・インカへ
	9:50	ムーラで運ぶ荷を預け, ワゴンでレンジャーテントへ 登山申請書提出
	1120	キャラバン開始(2900m)
	17:30	コンフルエンシア着(3300m)・泊
12/17(金)	9:11	高所順応のため, 南壁方面へ散歩
	15:45	南壁ベースキャンプ(プラザ・フランシア:4100m)着
	18:39	コンフルエンシア着(3300m)・泊
12/18(土)	7:52	B. C. (プラサ・デ・ムーラス)へ移動
	17:35	B. C. (4200m)着・泊
12/19(日)	11:06	高所順応(空身)
	15:22	4945m着(キャンプ・カナダを過ぎたところ)
	17:30	B. C. 着・泊
12/20(月)	9:05	高所順応(C1往復)とC1への荷上げ
	14:53	C1(カンビオ・デ・ペンディエンテ:5100m)着
	17:28	B. C. 着・泊
12/21(火)	10:43	高所順応(C1へ移動)
	15:50	C1着
		C1'(ニド・デ・コンドレス:5300m)往復(登り1時間, 下り20分)
	17:40	C1着・泊
12/22(水)	11:04	高所順応(C2:ベルリンキャンプ:5620m往復)とC2への荷上げ
	15:55	C2着
	17:32	C1着・C1撤収
	18:57	B. C. 着・泊
12/23(木)		B. C. で休養
12/24(金)		B. C. で休養
12/25(土)	11:45	C1へ移動
	19:15	C1着・泊
12/26(日)	10:02	C2へ移動
	15:40	C2着・泊(高所順応のため, 5800m付近まで登る)
12/27(月)	5:28	アコンカグアピークアタック
	16:23	**アコンカグア北峰(6962m)到着**
	20:30	C2着・泊
12/28(火)	11:03	下山
	12:16	C1着・デポの荷を回収
	15:17	B. C. 着・泊
12/29(水)	9:03	下山
	17:30	レンジャーテント着・登山終了(ごみを提出)
		タクシーでメンドーサへ戻る(23:00着)

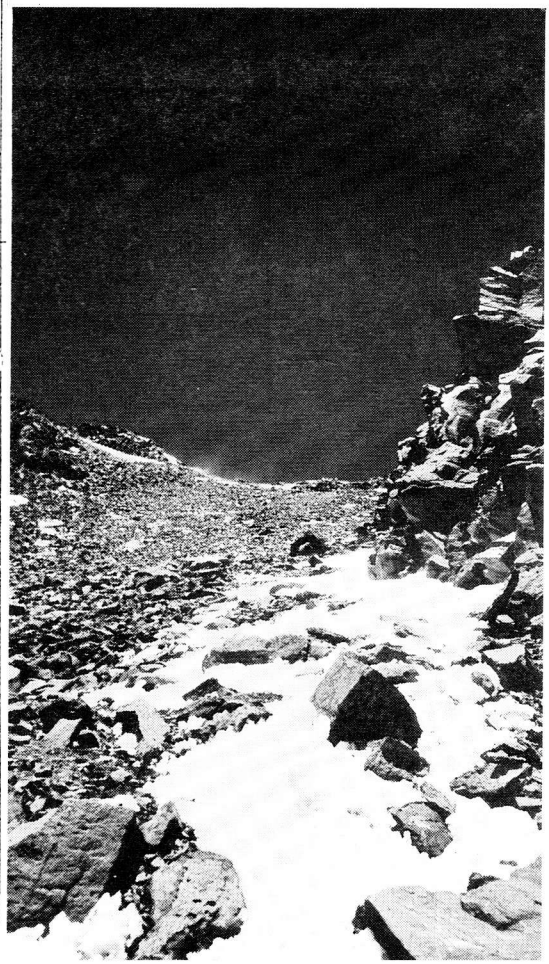
【B.C.からC１へのザレ、ジグの道。登り切った所がC１】

【Ｃ１からアコンカグアを見る（中央奥にピークへのトラバース道が見える）】

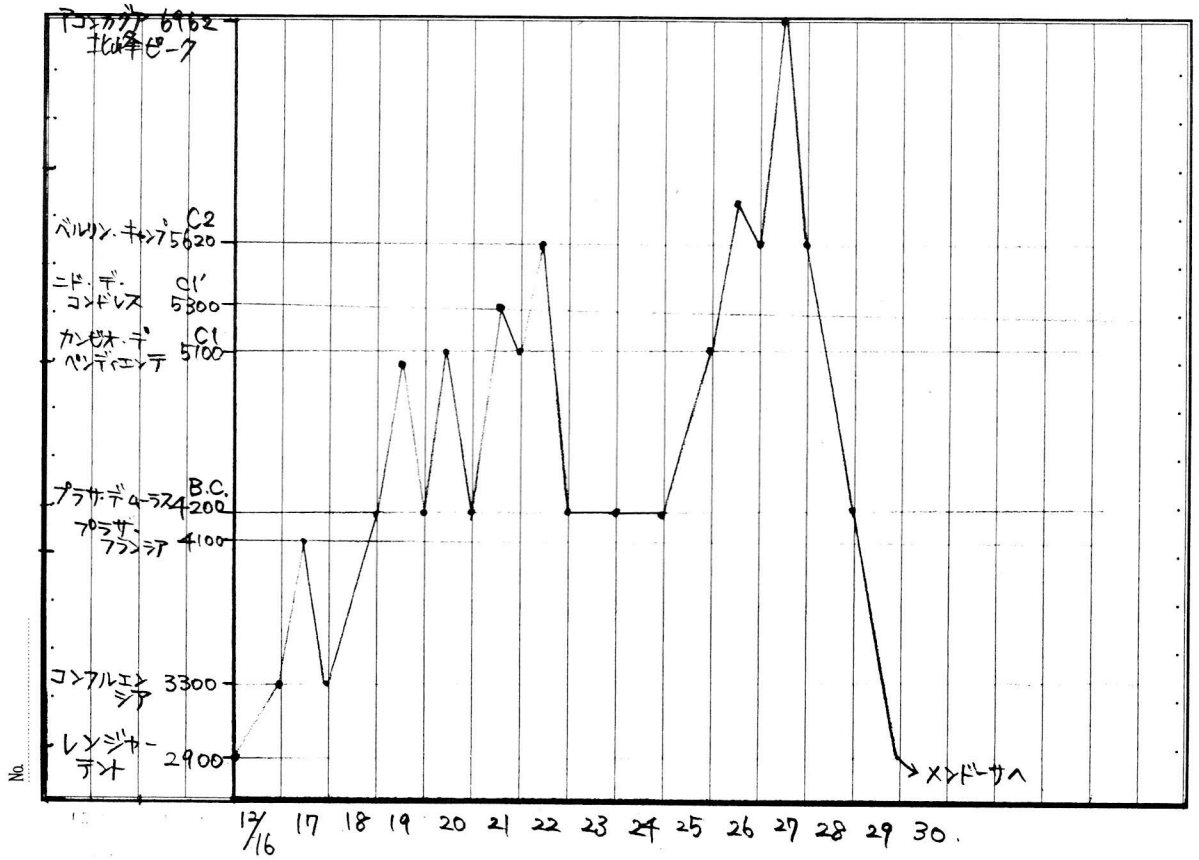
アコンカグア峰・周辺図



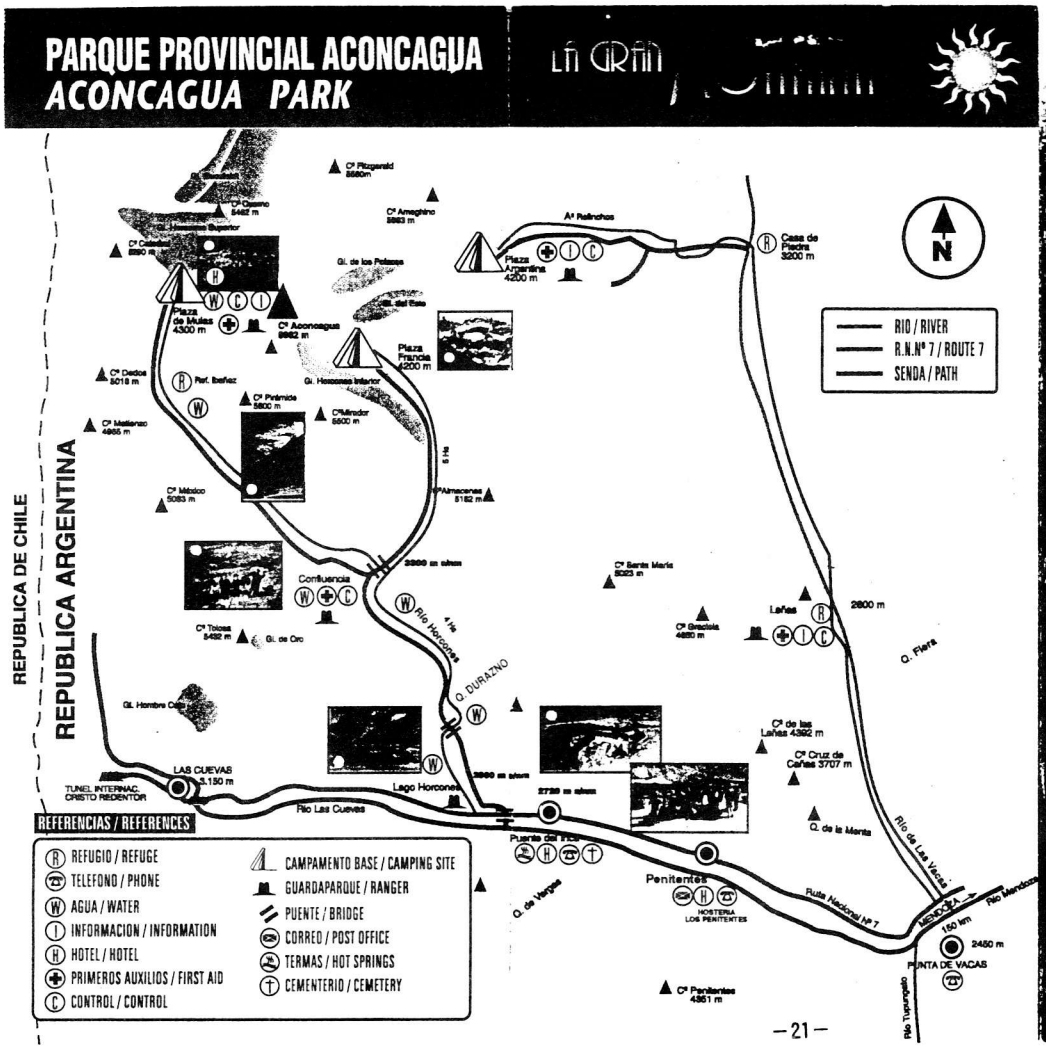
【カナレータ（ピークへの道。結構急で、6000m以上で、一歩一歩がつらかった。登り切って左奥がピーク。】

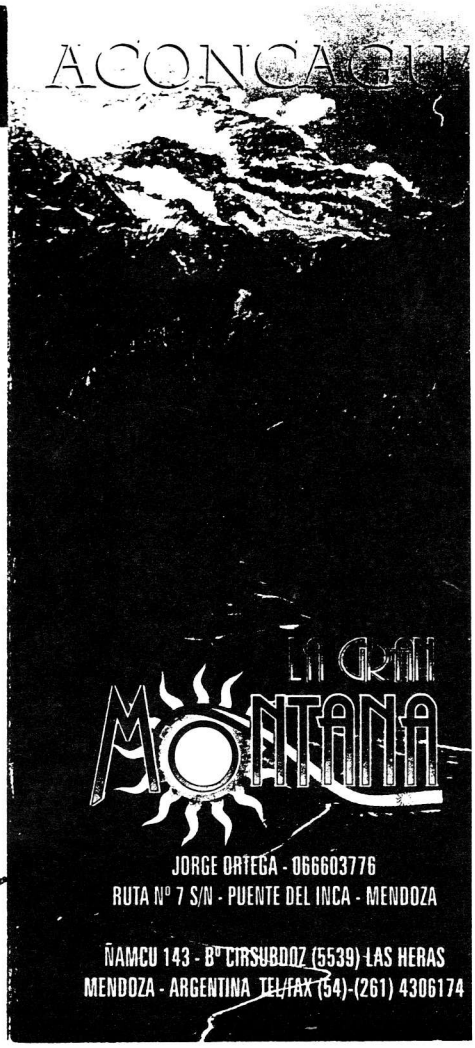


② 行動表



社団法人 福井市自家用自動車協会





【アコンカグア頂上。苦闘の末、16時23分やっと到着。疲れ切った。）】

装備リスト

＜日本から持っていった物＞

・テント（エクスペディション用）１張　（上部キャンプは強風です。B.C.用にもう一つあると便利。私達は持って上がったり下りたりで大変でした。）

・ピークワン（白ガソリンコンロ　白ガスは現地購入　ＥＰＩ、プリムスガスは売ってない。しかしキャンピングガスはある）

・プラ靴　・オーバーウェア上下　・鍋セット、まな板、ナイフ　・アイゼン（ピッケルは持っていかなかった。雪はあるが特に必要性は感じない。ストック…三浦雄一郎隊の隊がおいていったものをレンタルした）

・スパッツ、靴下　・毛手、オーバーミトン

・目出帽、帽子、サングラス　・テルモス

・ろうそく、ライター、固形メタ　・懐電

・コンパス（使わなかった）・シュラフ（厳冬期用）、シュラフカバー、エアマット

・地図（日本でアトラストレックの簡単な地図コース概略をもらいに行く。詳細な地図はない。道に迷うことはない）　・修理具

・じょうご　・布フィルター（B.C.近くの氷河の水は汚く、必要！浄化ポンプを使っている人も多い）　・医薬品（頭痛薬、胃腸薬、抗生物質、日焼け止めクリーム、カットバン、テーピング）

＜現地レンタル品＞

・ストック　・水ポリ　・ガスポリ

・ダウンジャケット

食料について

B.C.までのトレッキング中、B.C.での食料は現地調達した。

人参、玉ネギ、ジャガイモ、キャベツ、ニンニク、ソーセージ、チーズ、スープ、魚・貝の缶詰、シーチキン、オレンジ、米、パン、スパゲティ、クッキー、チョコ、ナッツ、ドライフルーツ、あめ、カステラ、ジャム、マヨネーズ、コーヒー、ココア、ジュースの素紅茶、砂糖、ビール、ワイン、ウィスキー

B.C.までは荷をムーラが運んでくれる（１頭60kgまでOK 120$）ので多く買いすぎた。余った物は日本人にあげてきた（困ったかもしれない！）

Ｃ１、Ｃ２での食事は全て日本食で持参した。これは泣けてくるくらいおいしくて**絶対に**必要やった（余裕があればもっと多くほしかった）

ジフィーズ、α米、ラーメン、みそ汁、お茶漬、ふりかけ、梅干し、緑茶、キャラメル、日本のあめ

費用について

・航空チケット（周遊）サンチアゴ⇌成田　209000

・国内移動、空港税etc.　45000

・サンチアゴ⇌メンドーサ（バス）20$×2

・登山許可証（20日間　Expedition）　120$
（High Season　12／15～？）
（Low Season　は80$　）

・ムーラ１頭（60kgまで）　120$

・メンドーサ～レンジャーテント　23$
（タクシー８$～バス10$～車５$）

・レンジャーテント～メンドーサ　100$
（タクシー１台をチャーター）

・メンドーサでの移動費　10$
（タクシー、バス）

・民宿アコンカグア宿泊費25$×４泊　100$
（少し高い！）

・手数料（日本への通信費、ムーラ。タクシーの手配など）　100$

・食料　100$

・ホワイトガソリン　9$

・装備レンタル（ダウンジャケット、　70$
　ガス入れ、水ポリ、ストック）

おまけ

アコンンカグア登山に17日間もかかっているし、南米は遠いし、新婚旅行がこれだけ？

心配しないで下さい。行く前にハワイで挙式をして、ワイキキビーチでリゾートもしたし、イースター島へモアイ像を見に行ったし、マイアミでイルカのフリッパーも見たし、アコンカグア疲れも、チリのリゾート地ビーニャ・デル・マルでのんびりし、甘～い新婚旅行を楽しんで帰ってきました。

何か、旅行から帰ってきて、新居への引っ越し、新生活、そして仕事を始めた私は、普通のおばさんになってしまって、アコンカグアへ登頂してきたということは、もうすご～く昔の、夢のような出来事のようです。

でも、私の体にしみついている゛ラテン゛の感覚が再び呼び掛けるのです。あ～～行きたい南米大陸！！絶対行くぞ！

次回も報告しますのでお楽しみに。そして、キリマンジャロ、アコンカグアときて、次は、マッキンリーを目指す予定です！？（もちろんマイパートナーと一緒です）

【おまけ　私のパートナー‘きよし’と。
1999.12.5ハワイにて】

p.s.　G.W.は“白山～ベルクハイム”と張り切って準備していたのですが、前日になって、“妊娠”が発覚し、日帰り登山、山菜採りに変更になりました。
いつか挑戦する予定です。
最近、週末は山にも行かず、マラソンもできず、家事と家の片付けに追われています。